

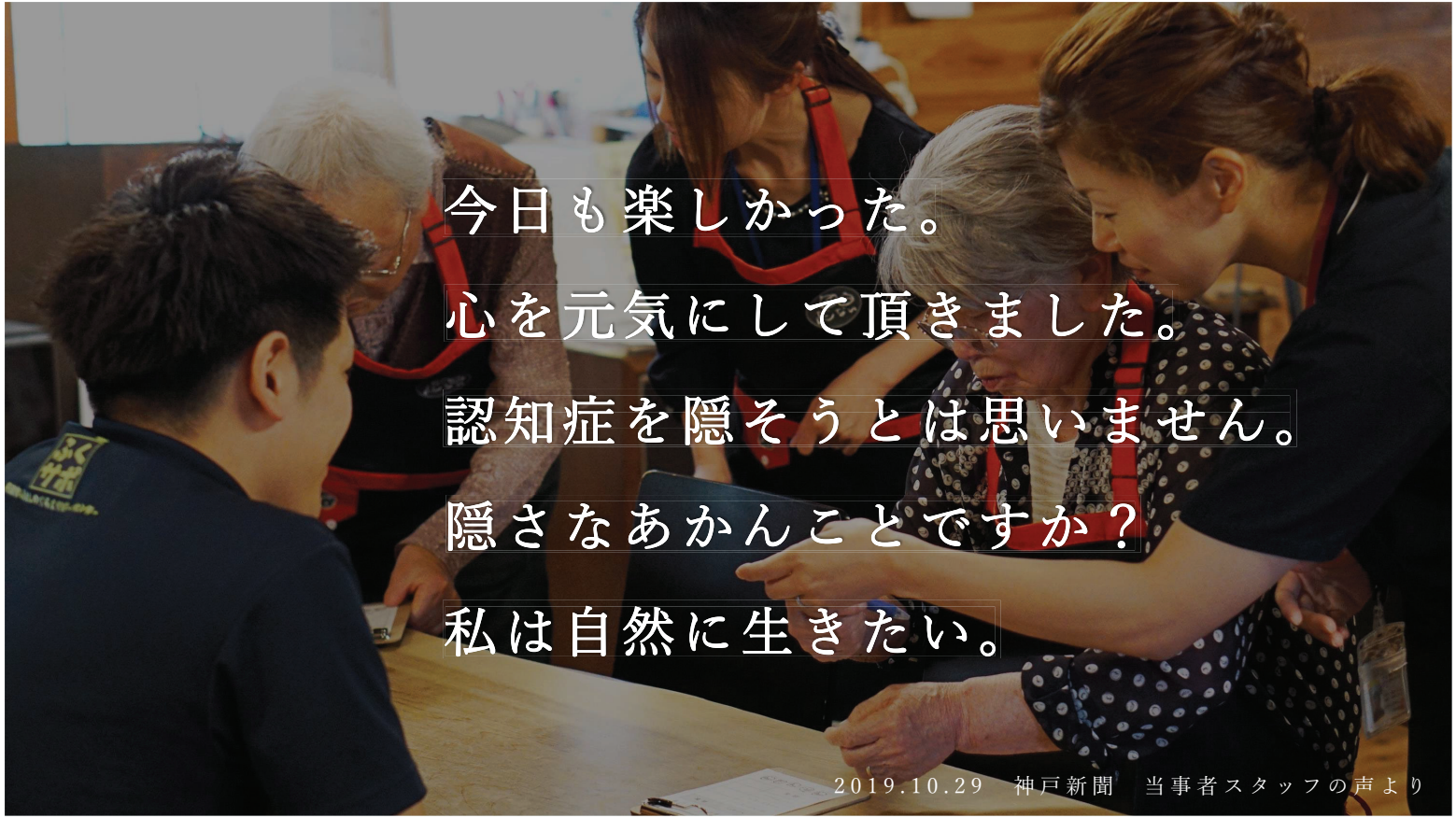


注文をまちがえる喫茶店 だんない

【東海・北陸ブロック】令和6年度地域づくり加速化事業研修会

【兵庫県】丹波市社会福祉協議会

生活支援コーディネーター
庄司 滉祐



今日も楽しかった。
心を元気にして頂きました。
認知症を隠そうとは思いません。
隠さなあかんことですか？
私は自然に生きたい。

2019.10.29 神戸新聞 当事者スタッフの声より



注文をまちがえる喫茶店 だんない

- 市民活動団体として設立
- 認知症当事者がスタッフの喫茶店
- 多様な参加方法を準備
- 地域の協働基盤で支える
- 企業等の多様な参画、賛同、支援
- 多世代への認知症の理解促進

5





目次

1

きっかけ

2

みんなをつなぐもの

3

共感から共創

4

築きと気付き



きっかけ



悔いが残っています。

認知症になっても
主人公として
活躍できる
場所があれば…

自身の母が認知症歴20年以上、介護度が低く、
まだまだ元気であった頃に”自分から何かを
して楽しむ経験”をいっぱいさせてあげた
かった。

「丹波で認知症になっても笑顔で活躍できる
素晴らしい場所を創れないか？」





注文をまちがえる喫茶店in丹波 企画実行委員会を設立 2019

相談を受けた生活支援コーディネーター（左）と認知症地域支援推進員（右）は、地域をまわる中で関心層を把握していたため、当事者家族（中央）、地域住民で実行委員会（市民活動団体）を設立。実行委員会では「たとえ忘れても、間違えても、温かく受け入れてもらえるような、そんな場所を地域の中に創っていきたい」という想いを共有し、喫茶店の名称を「注文をまちがえる喫茶店だんない」に決定。個人や地域、企業等の協力を得て、地域に根差した喫茶店を立ち上げることに。

13



企画コンセプト 役割分担

地域から必要とされ、
大切にされる場所に。
支援機関の自己満足、
一方的な指標で評価しない。
個別×地域（機能分化）



当事者・家族視点の重視
認知症地域支援推進員

- “在宅”で生活する当事者スタッフ
やご家族の意向を丁寧に確認
- “主体的な参画”を目指し当事者の
視点を積極的に企画に反映
- 地域住民や地域で生活する認知症
の方、そのご家族の視点を意識



地域との協働・継続事業
生活支援コーディネーター

- 単発的な“イベント”、地域・生活
者から“離れた”“浮いた”取り組み
ではなく地域に根差した継続的な
取り組みに。地域基盤の整備。
- 多様な主体との価値観の共有
- 三方よし

15

当事者・家族視点の重視

当事者・家族は当然のこと、来店者も安心できる場所に



丁寧な意思確認

信頼関係構築・不安を取り除く

- 企画趣旨を当事者、家族の両者
に説明
- 説明時には「認知症」の言葉を
濁さず伝える
- 同意書（当事者用・家族用）に
て最終意思確認



企画に当事者の視点を反映

当事者を中心に置く

- シミュレーションにて役割分担と“ま
ちがえない仕組み”を模索
- 本番後のミーティングにてスタッフ
全員で反省点や課題を共有
- 準備から本番終了までの全ての場面
に当事者スタッフが参加



行ってみたいと思えるプロモーション

生活者にとっても身近な場所に

- 一般の飲食店を貸し切り営業
- チラシ、HP、インスタグラム、PV、
ノベルティグッズ等を用いた広報活動
- 様々な媒体を介して当事者の声を発信

16

地域との協働、継続事業

“地域が後方支援を担う”ことで、関係人口も増え、周囲が協力しやすい体制を構築する。その中心を担うのは“第二層協議体”。

□ 理解促進の機会創出

自治組織や民生委員、地元高校、他地域等でだんないを盛り込んだ認知症サポーター養成講座の開催を進め、関係人口の増加を狙う。「まずはコーヒーでも飲みに来て？」



□ 呼びかけ

自治組織による広報配布、各世帯への無線で周知（地域の理解が無ければ不可能）。観光協会やコンビニ、飲食店等も周知協力に加わり、だんないを地域活性化の手段として活用する。

□ 居場所の創出

一般の方の来店に加え、専門職や民生委員等が、認知症の方以外にも、障がいのある方、ひきこもりの方など、気になる方のだんないを紹介し居場所として活用。この場所がきっかけで大きな変化が生まれた人も。



□ 地元企業の参画

提供する飲料、お菓子等はできるだけ地元企業のものを使う。相互利益を考えることで、多くの個人事業主、企業が社会貢献として物品・場所の提供や、周知協力で参画。



共感から共創

柏原地域 支えあい推進会議

「10年後の柏原地域を変える」

地域の力を結集する戦略会議

2016年から「地域生活を考える勉強会」等の知る・協議の機会を”人づくり”を行い、一般有志、自治組織や民生委員を中心に2018年に設立。地域生活課題解決に向けた協議を重ね、情報共有シミュレーションゲームの開発・実践、ガイドラインの策定、お米deつなぐ助け愛プロジェクト、買い物困難者支援、集いの場の普及、地域生活を考える勉強会等の継続開催（参加者は延べ2,000名以上、後継育成に着手）等を多様な主体と協働で行い、資源の活用・強化・開発、ネットワーク構築、小地域の協議活性・活動創出へのアプローチ等を行っている。「やってみたい」を大切にしている。

19

「この推進会議には”地域は変えられる”というのを強く実感する。
他の会議にはない、達成感・充実感を得られるんや。」

「任期を終えたけど、ここに残ってもええやろか？」

「2ヶ月に1回の会議では足りない…

参加できる人だけでも別日に集まりませんか？」

…等々



ひとりぼっちを
つくらないまち
かいばら



- 規範的統合
- ネットワーク構築
- 既存の取組支援
- 新たな取組創出



築きと気づき



築 き

自治会長「すごいな…ほんと地域に”根付いた”な」

(地域の子ども、若者、高齢者、障がいのある方、外国人が交わる店内を見ながら)

- ✓ “認知症になっても活躍できる社会”スローガンが地域づくりによって具現化されたことで、ビジョン・価値観の共有を図ることができ、「協力したい!」という声が多く、人材発掘の機能も。
- ✓ 地域・企業・関係機関の協働体制が構築され、他の取り組みにも波及し、付加価値を生んでいる。強みを結集し、弱みを補い合う体制。
- ✓ 当事者家族や関係者から「気軽に相談できる場所」として認識され、当事者を連れて来店するなど、この場から個別支援への展開も。
- ✓ 福祉教育で小学校に行くと「だんないのお兄ちゃんや!」
- ✓ 当事者や家族だけでなく、来店者が変わる。
- ✓ 変わっていく人、地域。同じビジョンを描く関係性。

23



気付き

全体最適を考えた上で、部分最適を追求する。

- ✓ 多様な主体と目的や問題意識、価値観を共有し協働体制を構築。人や組織のはたらきの最適化を考え、地域マネジメントの視点を広く持つことが重要であった。負担を減らし、成果を生む。
- ✓ “認知症”は入り口・協働領域。“地域”を舞台に共創することで、その先で共生の場が生まれた。(事業間連携)
- ✓ 組織化・運営は難しい。”継続して発展”するために常に協議、課題設定と解決の流れが必要になる。
- ✓ 地域の実践や成果が定着・累積する仕組みが課題。

生活支援体制整備事業開始時、地域に溜まっていた“不満”や“怒り”は相当なものでした。警戒から信頼関係構築へ、目的や問題意識の共有を丁寧に行い、意識や行動を変えていくアプローチがカギだったと思います。

24



Instagram

注文をまちがえる喫茶店in丹波企画実行委員会

25

認知症の親の介護で
苦労しました。
少しでも認知症に
対する理解が深まる
ことを期待しています。
頑張ってください。

皆さまのご来店を心よりお待ちしております
ありがとうございました

170代 男性

来店者感想ノートより